

「其の中の衆生は悉く是吾が子なり。而も今此の処は諸の患難多し。唯我一人のみ能く救護を為す」等云云。此の經文は釈尊は三義を備へ阿弥陀等の諸仏は三義欠けたり。此の義前々の如し。但し唯我一人の經文は小乗經の語にも非ず、諸大乘經の帶權赴機の説にも非ず、多宝十方の仏の証明を加へし金言なり。今の念仏者等の賢父の教言なり、明王の奉詔なり、聖師の教訓なり。三義に背き二十逆罪を犯し入阿鼻獄の人と成る事悲しむべし悲しむべし。是は法華經の初門の法門なり。次第に深く之を説かん云云。

迹門には三千塵点已来、娑婆世界の衆生は阿弥陀等の諸仏に棄てられ畢んぬ。化城喩品に云はく「爾の時に闍法の者、各の諸仏の所に在り乃至是の本因縁を以て今法華經を説く」云云。此くの如き經文は文に云はく「娑婆世界の衆生は過去三千塵点已来、一人として阿弥陀等の十方の十五仏の淨土へは生まるゝ者之無し」と。天台云はく「旧に西方を以て、以て長者を合す。今は之を用ひず。西方は仏別にして縁異なり、仏別なるが故に隱顯の義成ぜず。縁異なるが故に子父の義成ぜず。又此の經の首末に全く此の旨無し。眼を閉ぢて穿鑿す」と。妙樂云はく「西方等とは宿昔の縁別にして化道同じからず。結縁は生の如く成熟は養の如し。生養の縁異なれば子父成ぜず」等云云。此くの如きの文は十方の諸仏は養父、教主釈尊は親父なり。天台に多くの釈有りとは雖も此の釈を以て本と為すべし。所々に弥陀を讚むる事は且く依經による。例せば世親等の阿含經を讚めたるが如し。本門を以て之を論ずれば五百塵点已来釈尊の實子なり。然りと雖も或は世間に著して法華を捨て、或は小乗權大乘經に著して法華經を捨て、或は迹門に著して本門を知らず、或は当説に著して法華を捨て、或は十方の淨土に心を懸け、或は弥陀の淨土に心を懸ける等。今七宗八宗等の惡師に遇ふて法華を捨てるの間今に五百塵点を歴たり。涅槃經の二十二に云はく、天台云はく「若し惡友に値へば則ち本心を失ふ」と。疑つて云はく、本迹二門の流通たる藥王品に弥陀の淨土を勧めたり如何。答へて云はく、藥王品の弥陀は爾前迹門の弥陀に非ず。名同體異是なり。無量義經に云はく「言辞は一にして而も義は別異なり」云云。妙樂云はく「須臾も觀經等を指さざるなり」と。一切之を以て知るべし。所詮、發起影向等の深位の菩薩は十方の淨土より娑婆世界へ来たり、娑婆世界より十方淨土へ往く。